

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00046

研究課題名(和文) 出来事と実在性の現象学に関する日仏共同研究

研究課題名(英文) The Japan-French joint research on phenomenology of event and reality

研究代表者

米虫 正巳 (Komemushi, Masami)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：10283706

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日仏の研究者と共同作業を行なうことによって、「出来事」と「実在性」をめぐる哲学的問題に関して、フランス現象学の観点から新たな考え方を獲得することを目的とした。研究期間の最初の二年間と重なったコロナ禍のため、期間の前半はZoomを通じてのセミナーなど、限定的な仕方での共同研究にとどまらざるを得なかったが、研究期間を延長することで、コロナ禍も落ち着いた後半の二年間は、フランスで開催されたシンポジウムへの参加や日本で開催したシンポジウムなど、日仏の研究者たちと直接に交流することが可能となり、様々な成果を得ることができた。これらの成果はフランスや日本で書籍として公刊される予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「出来事」も「実在性」も、誰も経験するような身近で日常的にありふれた事柄であり、一見したところその意味は誰にも理解しやすいように思われるが、実際には様々な哲学的問題がそこに潜んでいる。例えば出来事は物とは何が異なるのか、あるいは出来事は存在か非存在かといった問題に一義的な答えを与えることは難しい。実在性についても同様であり、本研究では、これら二つの概念をめぐって、これまでの哲学の歴史における様々な考察を踏まえつつ、そうした考察では不十分だった点を考慮に入れ、フランス現象学の観点から新たな見方を手に入れることを試みた。こうした考察は、これらの概念をめぐる今後の研究の基礎となるものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to gain a new way of thinking about the philosophical issues surrounding “event” and “reality” from the perspective of French phenomenology by collaborating with Japanese and French researchers. Due to the Corona disaster, which coincided with the first two years of the research period, we had to limit our collaboration in two years to limited ways, such as seminars via Zoom, etc. However, by extending my research period, I was able to participate in symposiums held in France and symposiums held in Japan, which enabled me to interact directly with Japanese and French researchers and obtain a variety of results. These results will be published as the books in France and Japan.

研究分野：哲学

キーワード：フランス現象学 出来事 実在性

1. 研究開始当初の背景

「出来事 (événement, event)」も「実在性 = リアリティ (réalité, reality)」も、人がいつでも日常的に経験しているような、きわめて身近でありふれた事柄であり、一見したところ、その意味は誰にも理解しやすいように思われる。しかしながら実際には、次のような様々な哲学的問題がそこには潜んでいる。例えば、出来事は物理的実在としての物やその存在とは異なるのかどうか。出来事がものとは異なるとすれば、それは存在するものなのか、それとも存在するものではないのか。また出来事が物理的実在ではないとした場合、出来事の持つ実在性 = リアリティは物理的実在が持つ実在性 = リアリティと同様に、あるいはそれ以上にリアル = 実在的 (réel, real) なこともあるため、出来事の実在性 = リアリティとは一体何かということも問題となる。

こうして出来事について問うことは、同時に出来事の実在性や物理的実在の実在性も含めて、実在性一般について問うことにもつながる。しかし出来事と実在性をめぐるこれらの問いに対して、従来の哲学史では一義的な答えが与えられてきたとは言いがたい。そこで、これまでの哲学史における様々な考察を踏まえつつ、そうした考察では不十分だった点をフランス現象学の観点から補いつつ総合することで、これら二つの概念をめぐって新たな見方を手に入れることができるのではないかという見通しを抱いた。これが本研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「出来事」を物理的実在や存在とは異なるがそれらとは異なる「実在性」を有するものとして把握し、この出来事という実在に特有の実在性を解明することである。また出来事の実在性こそ実在性一般の核心にあるとすれば、出来事を出来事そのものとして解明することはそのまま実在性の本質を解明することにつながる。出来事と実在性という概念は、古代から現在までの哲学史の中で絶えず考察の対象となってきたことは言うまでもない。しかし、様々な哲学的立場の間で統一的な見解が出された訳ではなく、むしろこれらの概念をめぐる研究は、現在でも相互交渉のない状態にとどまっている。こうした状況に対して、本研究は出来事に固有の実在性を解明し、出来事を出来事そのものとして哲学的に探究する可能性を提示することによって、様々な立場を整理・総合しつつ、出来事と実在性の統一的な理解のための哲学的見通しと方向性を与えることを最終的な目的とする。

3. 研究の方法

「出来事」と「実在性」をめぐる哲学的問題に関して新たな考え方を獲得する本研究を遂行するにあたり、フランス現象学の観点から研究を遂行し、フランス現象学を専門分野とする日仏の研究者たちと共同作業を行なうことを主要な方法とした。

より具体的には、出来事とその実在性を次の三つの観点から解明することを目指した。(1) 出来事をめぐる経験の現象学的研究、(2) 数学的経験における実在性の現象学的研究、(3) 出来事と実在性をめぐる現象学と哲学史の再検討。これら三つのアプローチに基づいて、フランスの研究者たちとの緊密な協力関係のもとに、出来事と実在性についての日仏共同研究を遂行した。研究期間の最初の二年間はコロナ禍と重なったため、期間の前半は Zoom を通じてのセミナーなど、かなりの程度まで限定的な仕方での共同研究にとどまらざるを得なかったが、研究期間を一年延長することで、コロナ禍も落ち着いた後半の二年間は、フランスで開催されたシンポジウムへの参加や日本で開催したシンポジウムなどにおいて、ディディエ・フランク、フランソワ・タヴィッド・セバー、ドミニク・プラデル、エマニュエル・カタン、プリュス・ベゲー、ヴァンサン・ブランシェ、ポール・オーディをはじめとした多くの研究者たちと直接に交流しつつ共同作業を行なうことが可能となった。

3. 研究成果

「出来事」と「実在性」に関して主に以下のような研究成果を得ることができた。

(1) 出来事をめぐる経験の現象学的研究

いかなる経験も主体による経験・主体における経験である以上、出来事をめぐる経験についての研究も主体に即して行われなければならない。言い換えれば、それは出来事を経験する主体についての研究と不可分である。そのため本研究では現代フランス現象学に即してこの点を考察した(招待講演・学会発表の1)。しかも出来事を経験する主体はそれが生きていることを、すなわち生であることを前提とするのだから、それは主体である生についての研究と不可分である。そのため本研究では現代フランス現象学に即してこの点を考察した(招待講演・学会発表の

7) それでは生を生たらしめるものは一体何か。それを明らかにするため、生の本質の一つである「情感性」について現代フランス現象学に即してこの点を考察した(招待講演・学会発表の2)。

(2) 数学的経験における実在性の現象学的研究

数学的経験における実在性については、フランスの数理哲学者アルベール・ロトマン(1908-1944)による古典的研究が存在する。そこで、彼の著作の翻訳を手がけると共に、その数理哲学の内実についての検討を行ない、現代フランス哲学、とりわけドゥルーズとバディウへの影響関係と実在性の捉え方の変遷を明らかにした(解説の1、翻訳の1)。また数学も含めた科学一般に関しても実在性概念に即して応用的研究を試みた(招待講演・学会発表の6)。

(3) 出来事と実在性をめぐる現象学と哲学史の再検討

出来事と実在性を軸にして新たな「自然」概念の構築を試みると共に、この新たな自然概念の観点から現代に至る哲学史の再考を行なった(招待講演・学会発表の5、著作の2)。また出来事と実在性の概念を中心に据え、特にアンリとデリダの哲学に即して、フランス現象学の可能性と限界について検討を行なった(招待講演・学会発表の4、著作の1、論文の1)。そして出来事と実在性の観点から、スピノザ哲学とフィヒテ知識学の関係、タルドとフランス哲学史・学問史の関係について再検討を行なった(招待講演・学会発表の3、論文の2、3)。

これらの研究成果はまったく新しいものであり、出来事と実在性の概念をめぐる今後の研究の基礎となるものである。またこれら以外の研究成果もフランスや日本で書籍として公刊する予定である。

招待講演・学会発表

1. 米虫正巳「「内在」としての二つの主体 アンリとバディウ」, 日本ミシェル・アンリ哲学会第16回大会、於成城大学、2024年
2. Masami Komemushi, « L'affectivité trans-subjective », Colloque international « Nouvelles perspectives sur la réalité de l'affectivité », 於京都大学、2024年
3. 米虫正巳「フランスで出会ったフィヒテとスピノザ」, 日本フィヒテ協会大会第38回大会シンポジウム、於同志社大学&オンライン開催、2022年
4. Masami Komemushi, « Immanence (im)possible. Michel Henry ou Jacques Derrida ? », Colloque international à l'occasion du centenaire de la naissance de M. Henry « La pensée de Michel Henry », organisé par Beat Michel, Dominique Pradelle, François-David Sebbah, Institut de Recherches Philosophiques/Pôle de Philosophie française contemporaine de Nanterre, UR 3552 Métaphysique : histoires, transformations, actualité – Centre Emmanuel Levinas, UMR 8547 : Pays germaniques – Archives Husserl de Paris, à l'Université Paris Nanterre/Sorbonne Université, 2022年
5. 米虫正巳「いかに自然を思考するか」, 米虫正巳『自然の哲学史』合評会、オンライン開催、2021年
6. 米虫正巳「ポテンシャルを解放した先に シモンドンの読解をめぐって」, 宇佐美達朗『シモンドン哲学研究』合評会、大阪大学大学院人間科学研究科共生学系 未来共生学講座共生の人間学分野 および 科研費基盤(C)「哲学と人類学の交錯」主催、オンライン開催、2021年
7. 米虫正巳「生の現象学と非-哲学 アンリとラリュエルの交差と分岐」, 日本ミシェル・アンリ哲学会第12回大会、オンライン開催、2020年

著作

1. 川瀬雅也・米虫正巳・村松正隆・伊原木大祐編『ミシェル・アンリ読本』, 法政大学出版局、2022年
2. 米虫正巳『自然の哲学史』, 講談社、2021年

論文

1. Masami Komemushi, « Immanence (im)possible. Michel Henry ou Jacques Derrida ? », in Beat Michel, Dominique Pradelle, François-David Sebbah (dir.), *Immanence et Incarnation. Sur la pensée de Michel Henry*, Éditions Manucius, 2024.
2. 米虫正巳「フランスで出会ったフィヒテとスピノザ」, 『フィヒテ研究』第31号、日本フィヒテ協会、2023年
3. 米虫正巳「十九世紀末フランス哲学周辺のささやかなスピノザの影」, 上野修・杉山直樹・村松正隆編『スピノザと十九世紀フランス』, 岩波書店、2021年

解説

1. 米虫正巳「現代フランス哲学の先駆者アルベール・ロトマン」, アルベール・ロトマン『数理哲学論集 アイデア・実在・弁証法』所収、月曜社、2021年

翻訳

1. アルベール・ロトマン『数理哲学論集 アイデア・実在・弁証法』(共訳) 月曜社、2021年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 米虫正巳	4. 巻 第31号
2. 論文標題 フランスで出会ったフィヒテとスピノザ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 フィヒテ研究	6. 最初と最後の頁 20-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 4件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Masami Komemushi
2. 発表標題 Immanence (im)possible. Michel Henry ou Jacques Derrida ?
3. 学会等名 Colloque international a l'occasion du centenaire de la naissance de M. Henry "La pensee de Michel Henry"（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 米虫正巳
2. 発表標題 フランスで出会ったフィヒテとスピノザ
3. 学会等名 日本フィヒテ協会大会第38回大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 米虫正巳
2. 発表標題 ポテンシャルを解放した先に シモンドンの読解をめぐって
3. 学会等名 宇佐美達朗『シモンドン哲学研究』合評会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 米虫正巳
2. 発表標題 いかに自然を思考するか
3. 学会等名 合評会『自然の哲学史』（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 米虫正巳
2. 発表標題 生の現象学と非-哲学-アンリとラリュエルの交差と分岐
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会第12回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Masami Komemushi
2. 発表標題 L' affectivite trans-subjective
3. 学会等名 Nouvelles perspectives sur la realite de l'affectivite (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 米虫正巳
2. 発表標題 「内在」としての二つの主体 アンリとバディウ
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会第16回研究大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 川瀬雅也・米虫正巳・村松正隆・伊原木大祐（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 323
3. 書名 ミシェル・アンリ読本	

1. 著者名 アルベール・ロトマン、近藤和敬、中村大介、原田雅樹、米虫正巳訳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 月曜社	5. 総ページ数 191
3. 書名 『数理哲学論集 アイデア・実在・弁証法』	

1. 著者名 米虫正巳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 478
3. 書名 自然の哲学史	

1. 著者名 米虫正巳他、上野修、杉山直樹、村松正隆（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 298
3. 書名 スピノザと十九世紀フランス	

1. 著者名 Masami Komemushi et al. Beat Michel, Dominique Pradelle, Francois-David Sebbah (dir.)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Editions Manucius	5. 総ページ数 294
3. 書名 Immanence et Incarnation. Sur la pensee de Michel Henry	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Nouvelles perspectives sur la realite de l'affectivite	開催年 2024年 ~ 2024年
--	----------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------